

養護教諭の相談活動の実態

— 青森県小・中・高・養護学校全調査 —

筑波大学心理学系 松原 達哉¹

筑波大学大学院 (修) 教育研究科 村瀬 裕子

Counseling activities of school nurses (Survey in Aomori prefecture, Japan)

Tatsuya Matsubara and Yuko Murase (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study is to determine data of counseling activities by school nurses. An inquiry survey was made to 527 school nurses of Aomori prefecture, Japan, and correlation between the analyzed factors (their practice of counseling, their cooperation with other class-teachers and their experience of study about school counseling) and the confidence degree were analysed and examined. The main results were as follows;

- ① School nurses of junior and senior high schools have much experience in practice and they have more confidence in the health problems, the mental problems, and the problems of the daily life than elementary school nurses.
- ② School nurses who are more experienced (mostly older) and have experience of attendance formal lectures have higher confidence in regard to mental problems.

Key words : school nurses, counseling, confidence degree, mental problems, health problems

目 的

社会環境の激しい変化にともない、子供たちの心身の健康が最近、とみに悪化している。学校の保健室にも心身の問題をかかえた児童生徒が多数来室している。その子たちへの個別的対応を通して養護教諭が果たす役割は大きく、学校教育相談の立場からも養護教諭の相談活動は注目されている。しかし、養護教諭の相談活動は形式、内容ともにきわめて多様であるため組織的な研究が少なく、実態も明確であるとは言えない。そこで、本調査では、青森県の小、中、高、養護学校全校の相談活動の実態を明らかにすることを目的とした。

方 法

(1) 対象：青森県の小学校 436 校、中学校 176 校、高校及び養護学校 101 校、計 713 校に常勤している全養護教諭を対象とした。回収票は、計 544 校で回収率は 76.3%であった。さらに、無効票 17 枚を除いた 527 校が有効票である。うちわけは、小学校 318 校、中学校 138 校、高校 55 校、養護学校 16 校であった。なお、学校の規模は、在籍生徒数 400 人以下が 339 校 (64.8%)、401~800 人が 106 校 (20.3%)、801 人以上が 78 校 (14.9%) 不明 4 校である。

(2) 期間：昭和 62 年 9 月~10 月

(3) 調査内容：A 養護教諭自身のキャリアなどについて、及び、B 相談活動全般についての内容である。すなわち、養護教諭自身については、①年齢、②学歴、③免許の種類、④経験年数、⑤現在校への勤務年数、⑥研修会への参加経験、⑦心理療法の知識、⑧教育相談内容への自信度である。相談活動全

1 青森県教育センター所長の杉山芬先生はじめご協力くださった養護教諭の方々に厚く御礼申し上げます。

般については、①相談係の教員数、②来室生徒数、③身体的処置数、④相談時間、⑤相談件数、⑥連携などである。これらを質問紙法によって調査した。

(4) 調査方法：青森県教育センター所長より、青森県内の小学校、中学校、高校、養護学校長に質問紙を配布し、各校の養護教諭が無記名で記入してセンター宛に郵送するよう願った。

(5) 分析方法：調査結果の分析は、筑波大学大型コンピュータ-FACOM-M 780を用い、プログラムパッケージSPSSで統計処理を行った。

結 果

(1) 養護教諭自身のキャリア

① 年齢

養護教諭の年齢は、30歳未満が161人(30.6%)、31~40歳が230人(43.6%)、41歳以上が136人(25.8%)である。

② 学歴

養護教諭が卒業した養成機関を調べた結果、4年制大学73人(13.9%)、国立1年生別科、保健婦学

校156人(29.6%)、短期大学60人(11.4%)、養護教諭養成所158人(30.0%)、その他89人(16.9%)であった。

③ 養護教諭免許以外にもっている免許

養護教諭が自分の教諭としての免許以外にどのような免許を持っているかを調べた。結果は、看護婦免許262人(49.7%)、保健婦免許206人(39.1%)、教科免許(保健)245人(46.5%)、教科免許(保健以外)45人(8.5%)、その他40人(7.6%)である。

④ 経験年数

養護教諭としての経験年数は、5年以下が74人(14.2%)、6~15年266人(51.0%)、16年以上182人(34.9%)、不明5人であった。

⑤ 現在校の勤務年数

現在の学校における勤務年数は、3年以下が301人(57.7%)、4~10年199人(38.1%)、11年以上22人(4.2%)、不明5人であった。

⑥ 教育相談に関する研修会への参加経験

養護教諭が、教育相談に関する研修会にどの程度参加しているかを調べた。その結果、「なし」が234人(44.4%)、10日以下が240人(45.5%)、11日以

Table 1 心理療法の知識の程度

療 法 名	青 森 (527人中)				全 国 (315人中)				全 国 と の 差
	知っ ている	行 った こと が ある	自 信 が ある	今 後 学 習 したい	知っ ている	行 った こと が ある	自 信 が ある	今 後 学 習 したい	
来談者中心カウンセリング	196人 (37.2%)	134 (25.4)	9 (1.7)	265 (50.3)	126 (40.0)	108 (34.3)	14 (4.4)	125 (39.5)	**
遊戯療法	188 (35.7)	34 (6.5)	3 (0.6)	250 (47.4)	125 (39.7)	23 (7.3)	3 (1.0)	137 (43.5)	
自律訓練法	187 (35.5)	58 (11.0)	2 (0.4)	312 (59.2)	133 (42.2)	41 (13.0)	3 (1.0)	167 (53.0)	
催眠療法	159 (30.2)	8 (1.5)	2 (0.4)	243 (46.1)	126 (40.0)	10 (3.2)	0 (0.0)	126 (40.0)	**
ロールプレイング	150 (28.5)	35 (6.6)	0 (0.0)	246 (46.7)	118 (37.5)	91 (28.9)	6 (1.9)	118 (37.5)	**
集団カウンセリング	139 (26.4)	33 (6.8)	4 (0.8)	264 (50.1)	117 (37.1)	39 (12.4)	3 (1.0)	132 (41.9)	**
折衷的カウンセリング	80 (15.2)	32 (6.1)	2 (0.4)	279 (52.9)	56 (17.8)	18 (5.7)	7 (2.2)	166 (52.7)	
その他	4 (0.8)	4 (0.8)	1 (0.2)	61 (11.6)	10 (3.2)	2 (0.6)	2 (0.6)	33 (10.5)	

(無効なし)

(無効なし) * $p < .05$

** $p < .01$

上が53人(10.1%)であった。養護教諭が教育相談活動を実際に行っている割には、研修をうけていない人が44%もいて、多い。教育相談についての研修会に全く参加したことがない人を学校種別にみると、小学校で45%、中学校で43%、高校で30%いた。参加したという人でも3日程度の人が圧倒的に多く、11日程度参加した人は1割程度にとどまっていた。主催は県立教育センターや市町村の教育委員会が多く、民間のものは少ない。これらを見る限り、養護教諭を特に対象にした継続的な研修会(養護教諭の有志の勉強グループなど)はあまりなく、短期の、講義形式のものが多くと思われる。簡単に受講はできるものの、内容が不十分であるという意見も見受けられた。一般的に、自由記述欄に研修会への参加希望を書いた人は多く、研修会への参加経験の

ない人でも、今後、機会があれば、あるいは研修会が充実すれば参加するものと考えられる。

⑦ 心理療法の知識の程度

具体的にどのような心理療法についての知識があるかを調べた結果、Table 1のようになった。

来談者中心カウンセリングについては、56%の人が「知っている」が、集団カウンセリング、自律訓練法、催眠療法、ロールプレイング、遊戯療法などに関しては、6割以上の人が「知らない」ことが明らかになった。特に、小学校と中学校の養護教諭は、心理療法について知らない人が多い。小学校では、来談者中心カウンセリングにおいても7割の人が「知らない」と答えている。

全国の調査結果と比較すると、全般的に知っている人の割合が少ない。それぞれの心理療法に関して

Table 2 相談内容別自信度

程度 相談内容	青森(507人中)				全国(303人中)				全国との差
	かなり自信がある	すこし自信がある	あまり自信がない	ほとんど自信がない	かなり自信がある	すこし自信がある	あまり自信がない	ほとんど自信がない	
身体的健康問題 (身体的異常など)	67人 (13.2%)	328 (64.7)	105 (20.7)	7 (1.4)	60 (19.8)	187 (61.7)	52 (17.2)	4 (1.3)	
愁訴(気分不良など)	36 (7.1)	291 (57.4)	161 (31.8)	19 (3.7)	39 (12.9)	178 (58.7)	75 (24.8)	11 (3.6)	*
不規則な生活習慣 (不眠など)	34 (6.7)	289 (57.0)	166 (32.7)	18 (3.6)	40 (13.2)	178 (58.7)	74 (24.4)	11 (3.6)	*
異性や性に関する悩みや問題	18 (3.6)	213 (42.0)	234 (46.2)	42 (8.3)	23 (7.6)	148 (48.8)	106 (35.0)	26 (8.6)	**
交友関係に関する悩みや問題	4 (0.8)	145 (28.6)	300 (59.2)	58 (11.4)	9 (3.0)	103 (34.0)	165 (54.5)	26 (8.6)	*
その他の心因のからんだ健康問題(摂食障害など)	8 (1.6)	138 (27.2)	307 (60.6)	54 (10.7)	14 (4.6)	105 (34.7)	156 (51.5)	28 (9.2)	**
学習や進路に関する悩みや問題	3 (0.6)	128 (25.2)	301 (59.4)	75 (14.8)	8 (2.6)	78 (25.7)	178 (58.7)	39 (12.9)	
家庭に関する悩みや問題	5 (1.0)	94 (18.5)	327 (64.5)	81 (16.0)	9 (3.0)	90 (29.7)	167 (55.1)	37 (12.2)	**
登校拒否	6 (1.2)	82 (16.2)	336 (66.3)	83 (16.4)	12 (4.0)	67 (22.1)	164 (54.1)	60 (19.8)	**
問題行動(非行など)	3 (0.6)	78 (15.4)	317 (62.5)	109 (21.5)	13 (4.3)	70 (23.1)	178 (58.7)	42 (13.9)	**
神経症 (ノイローゼなど)	5 (1.0)	74 (14.6)	325 (64.1)	103 (20.3)	14 (4.6)	69 (22.8)	172 (56.2)	48 (15.8)	**

(無効20ケースを除く)

(無効12ケースを除く)

* $p < .05$

** $p < .01$

「知っている」人と「知らない」人の割合を青森と全国の間で χ^2 検定したところ、来談者中心療法、催眠療法、ロールプレイング、集団カウンセリングに有意差がみられた($p < .01$)。これらに関して知らない人が多いのは前述のように、実習形式の勉強会が少ないためであると思われる。

⑧ 教育相談内容に対する自信度

自信度については、前述の11項目の問題内容別に、相談を受理する自信の有無を「ほとんど自信がない」から「かなり自信がある」までの4段階の回答方式で質問した。その結果、Table 2のようになった。

養護教諭の専門分野である「身体的健康問題」は自信のある人が多いが、「登校拒否」「問題行動」「神経症」などに対しては約8割が「あまり」あるいは「ほとんど自信がない」と答えている。

全国の調査結果と比較すると、ほとんどの相談内容に対して、青森県の養護教諭のほうが有意に自信が低い。特に「神経症」「問題行動」「家庭に関する悩みや問題」にこの傾向がめだつた。

さらに、これを整理するため、得点化し、因子分析を行ったところ、次のようになった (Table 3)。

第1因子に関して因子負荷量が0.5以上の項目は「身体的健康問題」「愁訴」「不規則な生活習慣」に対する自信度であった。第2因子では同様に「学習や進路に関する悩みや問題」「交友関係に関する悩みや問題」「異性や性に関する悩みや問題」「家庭に関する悩みや問題」「問題行動」が抽出された。第3因子では「登校拒否」「神経症」「その他の心因のからんだ健康問題」が抽出された。そこで、第1因子を「健康上の問題」に対する自信度、第2因子を「生活上の問題」に対する自信度、第3因子を「精神上

Table 3 自信度の因子分析

	因 子		
	因子1の負荷量	因子2の負荷量	因子3の負荷量
身体的健康問題 (身体的異常など)	0.79	0.21	0.14
愁訴 (気分不良など)	0.74	0.16	0.32
不規則な生活習慣 (不眠など)	0.68	0.32	0.16
学習や進路に関する悩み や問題	0.23	0.66	0.17
交友関係に関する悩みや 問題	0.22	0.60	0.32
異性や性に関する悩みや 問題	0.43	0.59	0.17
家庭に関する悩みや問題	0.21	0.57	0.30
問題行動 (非行など)	0.09	0.56	0.44
登校拒否	0.16	0.26	0.71
神経症(ノイローゼなど)	0.24	0.28	0.61
その他の心因のからんだ 健康問題(摂食障害など)	0.40	0.28	0.51

*ただし、負荷量はバリマックス回転後のものである

の問題」に対する自信度と命名し, 相談内容により3分野に分類した。

問題別に自信度の得点をみると, 健康上の問題に対する自信が高く, 生活上の問題に対する自信と精神上の問題に対する自信はほぼ等しく, 平均すると, 前者は「少し自信がある」, 後者は「あまり自信がない」人が多いことが明らかになった。

学校種別にみると, 全般的に小学校で自信が低く, 中学校で自信が高いという結果になった。年齢別にみると, 若い養護教諭よりも中高年の人の方が自信が高かった。免許別では看護婦免許をもっている人の方がもっていない人よりも自信が高かった。ただし, 年齢, 免許とも有意差があるのは精神上の問題に対する自信のみであった。一方, 学校種は, どの問題における自信度にも有意差をもたらしており, 学校種の, 自信度への影響の強さが注目される。このことは, 分散分析の結果にも現れていた。しかし, 学校種の影響が非常に強いのは, 青森県の小学校には小規模校が多いためであると思われる。つまり, 小学校と中学校, 高校との差というより, 小規模校と中・大規模校の差の影響が強いと考えたほうが適当であろう。

(2) 相談活動全般

① 相談系の教員数

各学校内に, 専任か教科教員兼務の相談系の教員がいるかどうかを調べた。結果は, 専任の相談係がいる学校が54校(10.2%), (そのうち常勤相談係がいるのが29校(5.5%)), 教科教員が兼ねているのが125校(23.7%)であった。

② 来室児童生徒数

保健室に児童生徒が1日平均何人来室するのか調べた。結果はTable 4のようで1~5人が212校(41.6%)で最も多く, 6~10人が130校(25.5%)である。なお, 21人以上の学校も62校(12.2%)あった。

③ 身体処置数

1日平均当りの身体的処置数を調べてみると, Table 4のようで, 1~5人が327校(64.1%)であって多い, 11人以上の学校も40校(7.8%)ある。

Table 4 1日平均の来室数と身体的処置数

人数	0人	1~5人	~10	~15	~20	21~	不明
来室数	16校 (3.1%)	212 (41.6)	130 (25.5)	51 (10.0)	39 (7.6)	62 (12.7)	17
身体的処置数	36 (7.1)	327 (64.1)	107 (21.0)	40 (7.8)			17

④ 相談時間

1日当りの平均相談時間(対生徒)については, 「なし」が116人(23.1%), 1~30分が192人(38.2%), 31~60分が132人(26.2%), 61分以上が63人(12.6%), 不明が24人であった。「特に時間をとっていない」と回答した人も多く, また, 「1人につき10分以内」という回答も見られ, 養護教諭の相談活動の随時性が示されているといえよう。また, 学校による差(回答のばらつき)が大きい, これはどの程度のもを「相談」とするかという判断が人によって異なったからであると考えられる。学校種別にみると小学校よりも中学校と高校の方が相談時間が長かった。全国の結果と比較すると, 青森では小学校, 中学校, 高校とも相談時間が短いことが明らかになった。

⑤ 相談件数

保健室に, 児童生徒がどのような相談をもって訪れるか, 悩みや問題を11に分類して, 過去1年間に扱った件数を調べた。結果は, Table 5のようである。

相談の最も多いのは「愁訴」である。6件以上が217校(44.5%)もある。第2位は「身体的健康問題」であって, 1~5件が205校(42.0%), 6件以上が178校(36.5%)である。これは養護教諭の専門分野であり, 多いのは当然であろう。第3位は「不規則な生活習慣」で, その他「異性や性に関する悩みや問題」も多い。「学習や進路に関する悩みや問題」は0件の学校も多いが, 6件以上の学校も多い。一般には学級担任が相談にあたる内容が多い内容である。なお, 「登校拒否」の相談は, 半数近くの学校(44.6%)で1件以上受理している。「問題行動」についても20.7%の学校が1件以上扱っている。養護教諭は多様な相談を受理していることが確認されたといつてよいであろう。

学校種別にみると, 全体に, 中学校と高校のほうが小学校よりも相談件数が多かった。特に「異性や性に関する悩みや問題」「問題行動」「家庭に関する悩みや問題」「学習や進路に関する悩みや問題」にこの傾向が大きく, 小学校ではこれらについての相談が「なし」である学校は8割にのぼるが, 中学校と高校では「なし」と答えたのは4割以下であった。

全国の結果と比較すると, どの問題についても相談件数は少なく, 「愁訴」と「身体的健康問題」を除けば, 半数以上の人が「なし」と答えている。

相談件数は学校種による差が大きいので, 学校種別に全国の結果と比較することも必要であろう。そこで, 相談件数の有無を学校種別に χ^2 検定で全国と比較した。その結果, 小学校では「神経症」と「登

校拒否」の件数が有意に少なかった。中学校では「神経症」と交友関係と異性・性と学習・進路に関する悩みや問題の相談件数において有意差がみられた。高校では小学校と同様、「神経症」と「登校拒否」の件数が有意に少なかった。

⑤ 関係者との連携

養護教諭が相談活動を行う場合、学級担任などと連携をとりながら活動を進めて行くのが望ましいと言うことはよく言われることである。そこで、実際に、どの程度、連携がとられているのかを調べるために、気がかりな生徒のことで関係者に相談する頻度と相談される頻度を調べた。

その結果、小学校、中学校とも、学級担任に相談したりされたりする割合が最も大きく、月に1～2回以上と答えた人は8割近くいた(Table 6)。また、

どの関係者に対する連携の度合も、中学校と高校のほうが小学校よりも高く、特に学級担任、学年主任・教務主任・他教師、生徒指導主事、校長・教頭といった学校内の教師に対する連携の度合は、中学校が最も高かった。例えば、生徒指導主事と月に1～2回以上連携をとると答えたのは、小学校では22.5%、中学校で61.1%、高校で29.1%であった。

一般的に、学級担任以外の関係者とは余り連携をとっておらず、半年に1回以下しか連携をとらない人が半数、あるいはそれ以上にのぼった。連携の大切なことはよく言われていても、実際には、養護教諭の認識不足や他教師の無理解、時間不足などの理由により、連携がうまくとれないまま終わることも少なくないということがうかがわれる。

なお、全国調査との比較では顕著な違いはみられ

Table 5 過去1年間に扱った相談件数

相談内容	青森県 (488校中)			全国 (276校中)		
	なし	1～5件	6件以上	なし	1～5件	6件以上
愁訴 (気分不良など)	101校 (21.5%)	170 (34.8)	217 (44.5)	43 (15.6)	64 (23.2)	169 (61.2)
身体的健康問題 (身体的異常など)	105 (21.5)	205 (42.0)	178 (36.5)	45 (16.3)	90 (32.6)	141 (51.1)
不規則な生活習慣 (不眠など)	210 (43.0)	186 (38.1)	92 (18.9)	87 (31.5)	92 (33.3)	97 (35.1)
交友関係に関する悩み や問題	225 (46.1)	222 (45.5)	41 (8.4)	79 (28.6)	150 (54.3)	47 (17.0)
登校拒否	270 (55.3)	208 (42.6)	10 (2.0)	89 (32.2)	171 (62.0)	16 (5.8)
家庭に関する悩みや問 題	298 (61.1)	164 (33.6)	26 (5.3)	106 (38.4)	133 (48.2)	37 (13.4)
異性や性に関する悩み や問題	301 (61.7)	142 (29.1)	45 (9.2)	118 (39.1)	104 (37.7)	64 (23.2)
その他の心因のからん だ健康問題 (摂食障害など)	305 (62.5)	148 (30.3)	35 (7.2)	118 (42.8)	125 (45.3)	33 (12.0)
学習や進路に関する悩 みや問題	347 (71.1)	99 (20.3)	42 (8.6)	120 (43.5)	92 (33.3)	64 (23.2)
問題行動 (非行など)	387 (79.3)	83 (17.0)	18 (3.7)	168 (60.9)	76 (27.5)	32 (11.6)
神経症(ノイローゼな ど)	411 (84.2)	74 (15.2)	3 (0.6)	149 (54.0)	106 (38.4)	21 (7.6)

(無効39ケースを除く)

(無効39ケースを除く)

Table 6 関係者との連携

連携者	相談する					相談される				
	ほとんど毎日	週に1～2回	月に1～2回	2, 3か月に1回	半年に1回以下	ほとんど毎日	週に1～2回	月に1～2回	2, 3か月に1回	半年に1回以下
1. 学級担任	64人 (12.4)	196 (37.8)	141 (27.2)	78 (15.0)	39 (7.5)	41 (7.9)	155 (29.9)	167 (32.2)	107 (20.7)	48 (9.3)
2. 学年主任教務主任他教師	11 (2.1)	68 (13.1)	115 (22.2)	90 (17.4)	234 (45.2)	7 (1.4)	48 (9.3)	103 (19.9)	100 (19.3)	260 (50.2)
3. 生徒指導主事	7 (1.4)	41 (7.9)	110 (21.2)	101 (19.5)	259 (50.0)	5 (1.0)	28 (5.4)	87 (16.8)	109 (21.0)	289 (55.8)
4. 校長, 教頭	10 (1.9)	39 (7.5)	109 (21.0)	124 (23.9)	236 (45.6)	6 (1.2)	29 (5.6)	78 (15.1)	115 (22.2)	290 (56.0)
5. 保健主事	16 (3.0)	67 (12.9)	112 (21.6)	75 (14.5)	248 (47.9)	8 (1.5)	34 (6.6)	97 (18.7)	90 (17.4)	289 (55.8)
6. 学校医	0 (0.0)	4 (0.8)	18 (3.5)	96 (18.5)	400 (77.2)	1 (0.2)	1 (0.2)	10 (1.9)	28 (5.4)	478 (92.3)
7. 保護者	4 (0.8)	14 (2.7)	81 (15.6)	157 (30.3)	262 (50.6)	4 (0.8)	9 (1.7)	96 (18.5)	169 (32.6)	240 (46.3)
8. 他校の教師	0 (0.0)	4 (0.8)	31 (6.0)	107 (20.7)	376 (72.6)	1 (0.2)	4 (0.8)	31 (6.0)	92 (17.8)	390 (75.3)
9. その他	1 (0.2)	7 (1.4)	7 (1.4)	12 (2.3)	491 (94.8)	0 (0.0)	5 (1.0)	6 (1.2)	3 (0.6)	504 (97.3)

無効 9 ケースを除く

なかった。

項目間の関係の分析

1. 連携と自信

気がかりな生徒のことについて関係者と連携をとる度合と自信度との関係を分析した結果, 校長・教頭と学校医の項については差がみられなかったが, それ以外では, よく連携をとっている人のほうが, 自信が高いということがわかった。特に, 生活上の問題と精神上的の問題に対する自信度は, 保護者や, 他校の教師などの, 学校外の関係者と連携とる度合の高い人のほうが, 高いという傾向がみられた。また, 全般的に, 自分から相談するかどうかよりも相手から相談されるかどうかによって, 自信度の高低は変化する。つまり, 学校外及び学校内の人々からよく相談される人ほど, 相談活動(対生徒)の自信が高いということである。これらは全国の結果とおおむね一致する。

2. 実践と自信

過去1年間に各問題について相談を受理したこと

がある人のほうが, ない人よりもその問題に対する自信が高いという結果になった。特に, 精神上的の問題においてこの傾向が強くみられた。このことは全国の結果と一致する。しかし, 「実践」状態は学校種によって大きく異なる。特に青森では学校差が大きい。また, 青森では, 学校種の自信に与える影響が強いこともいままでの結果から明らかになっている。これらを考慮するため, 実践(相談経験)を単独で分析するだけでなく, 学校種との2要因での分散分析も行った。

その結果, 精神上的の問題と生活上の問題に関しては, 実践経験がある人のほうがない人よりも自信が高く, 健康上の問題に対する自信度に関しては学校種の影響のほうが強いということが明らかになった。

3. 学習と自信

教育相談に関する研修会への参加経験のある人のほうが, ない人よりも精神上的の問題及び生活上の問題に対する自信が高かった。

心理療法の知識と自信の関係は, どの問題に対す

る自信度も、それぞれの心理療法の知識をもっている人のほうがもっていない人よりも高いという結果になった。特に、精神上の問題に対する自信度と心理療法の知識との関係が最も顕著であった。ただし、全国と比較すると全般的に自信度が低く、研修会に参加した人でも自信がないと答えた人が多かった点、注目される点であろう。これは、前述のように、実習形式の研修会や継続的な研修会など、「自信」につながるような研修会が青森には少ないためであると思われる。

4. まとめ

以上の結果から総合すると以下のことが明らかになった。

全国と比較して顕著な傾向は、小規模校が多いこと、相談活動を行っていない学校が多いこと、また、教育相談に関する研修会はあるが時間、内容とも不十分なものが多いこと、それらのために自信のない養護教諭が多いことなどである。分析結果からも、学校種がどの項目にも多大の影響をもっていることもわかる。すなわち、全国の結果のように学校種は生活上の問題だけに特に関連があるとは言えないということである。今後、養護教諭の相談活動を研究する場合、以上のことを考慮する必要があるであろう。

文 献

調査用紙作成のために以下の文献を参考にした。

- 石原昌江 1980 個別的養護指導論構成への試み 岡山大学教育学部研究集録, 53, 75-91.
- 石原昌江 1981 個別的養護指導論構成への試み (その2) 岡山大学教育学部研究集録, 56, 17-62.
- 今井五郎 (編著) 1986 学校教育相談の実際 学事出版
- 江口篤寿 1985 保健室の役割 学校保健研究, 27-1, 2-4.
- 木原知江 1986 養護教諭の執務遂行に関する現状と課題 筑波大学大学院体育研究科修士論文
- 紺野勝 1986 養護教諭の相談活動の程度を規定する要因の研究, 相談学研究, 18-2.
- 鈴木美智子他 1987 思春期精神保健におけるシステム間の連携の可能性第一報 東京学芸大学附属大泉中学校研究集録, 27, 81-98.
- 全国国立大学附属学校養護教諭部会 1986 学校保健領域における相談活動—手引き—教育方法等改善研究, 3, 同会.
- 譜久村イツ子 1983 保健室における相談活動 那覇市立教育研究所研究報告書紀要, 115, 1-46.
- 森田光子 1985 保健室を訪れる子どもの実態とその対応—高等学校— 学校保健研究, 27-1, 15-18.
- 吉川昭吉 1984 学校における教育相談の実態に関する調査 兵庫県立教育研修所 第95集研究紀要, 49-67.

—1988.9.30 受稿—